

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

列福・列聖制度の

起源とねらい

大司祭 高見 三明

いつから、どのようになっ

ステファノ以来、ローマ帝国の迫害時代を経て今日に至るまで至るところで数知れないキリスト信者が、キリストに倣って殉教しました。最初は、これらの殉教者たちが、そして四世紀頃からは諸徳に秀でた人々も崇敬されるようになりました。まず殉教者などの墓を訪れて崇敬を表したのは、信者たちでした。そのような崇敬を見守っていた司教たちは、殉教者、あるいは聖なる生活を送り死後も奇跡をもってその聖性を現わした人(神のしもべ)について調査した上で、彼らを「公に崇敬すること」をその教区内で許可しました。また各地域あるいは各国の教会会議もその管轄内で同じような許可を与えました。

五世紀頃から、「遺骸の高揚」あるいは「移転」、すなわち祭壇の墓にあらたに安置することが、事実上の列聖式でした。そのとき、「伝記」も書かれました。「移転」のためには、できる限り全教会の賛同が必要でしたので、教皇の介入が望まれました。こうして次第に教皇の宣言が決定的な行為になり、「移転」は事後の儀式という性格しかもたなくなりました。なお、中世までは「福者」と「聖人」の区別はありませんでした。

1171年、教皇アレクサンデル三世は、列福を宣言する権利は教皇にのみ留保され、従って聖人の崇敬には教皇の許可を要すると規定しました。教皇ウルバノ八世は、1631年に列福手続きの方法を決定し、三年後に次の

- ような規定を設けました。
- ①アレクサンデル三世教皇以前に教会で公に崇敬を受けている人たちについてはそのままにする。
 - ②それ以後1634年まで崇敬された人々については、聖座に許可を申請することができる。
 - ③将来については、本来の列福手続きが完了するまで誰も福者として崇敬されてはならない。
- 従って、以後、神のしもべの崇敬に関することは、いっさい教皇庁に留保されることとする。

ちなみに、日本二十六殉教者は、1627年、同教皇によって列福されています。

教皇アレクサンデル七世(1655〜167年)は聖ペトロ大聖堂での列福式をもつて列福手続きの儀式完了とし、それ以後列福と列聖とが名称の上でも内容の上でも正確に区別されることになりました。ウルバノ八世によって確立された列福・列聖手続きは、ベネディクト十四世(1740〜58年)によって完成され、さらにいくらか修正され明確にされて、1917年公布の教会法典(1999〜2141条)に記載されました。

列福と列聖のちがい

列福は、教皇が、聖なる生活の後亡くなった神のしもべが一定の場所(教

区、管区、国、いくつかの修道会共同体など)で「福者」として公に崇敬されることを許可する行為です。それは、神のしもべがその聖なる生活ととりなしによる奇跡ゆえに天上で永遠の幸いを味わっていると考えるに足る非常に重大な動機があると教会が宣言する予備的な行為です。従って、福者は特別な許可がなければ教会堂や国の保護者にされ得ず、その画像には光輪ではなく頭の周りに環光がつけられるだけです。

これに対して、列聖は、決定的な行為です。所定の手続きの最後に、教皇がその使徒的権威によってすべてのキリスト者に課す裁定を宣言する最終的な結論です。列聖された神のしもべは、聖人の列に加えられ、全世界の信者から崇敬を受けることとなります。

ねらいは？

新教会法によれば、教会が聖母マリアに「特別の孝愛に満ちた尊敬」を払い、他の聖人たちへの「真の正しい崇敬」を勧め奨励するのは、「神の民の聖化を涵養するため」、すなわち「キリスト信者が確かにその模範によって薫陶され、その取り次ぎによって助けられるため」です(186条)。なお、神のしもべたちの列聖手続きは、教皇特別法で規定されています(1403条第1項)。

Q&A...

「列福・列聖の

起源とねらい」



日本の聖母(大浦天主堂)

Q. ある人を公けに福者または聖人として宣言し、特別の崇敬を払うということは、ほかの宗教では見られないことのようにですが、カトリックでは、どうしてこの制度を設けたのでしょうか。

A. このことについては、第一面で高見大司教さまが分かりやすく書いておられますので、よく読んでいただきたいと思います。

列福・列聖の制度については、まず制度が先にあつたのではなく、とくに殉教者に対する崇敬が先にあつたということになります。使徒言行録(7章)に出てくる助祭ステフ

アノ以来、古代ローマ時代にも多くの殉教者が排出しました。

かれらの英雄的行為に触発されて、周りの信仰心も高揚され、殉教者崇敬の気運も高められていったことは容易に推察されます。

しかし、ものごとの常として、そういう気運が熱を帯びてくると、一方では行き過ぎ現象も現われるようになり、これをコントロールするため一定の制度を設けるきっかけになったというわけです。

Q. 列福・列聖制度の公式のねらいについては、教会法の条文に記されたもので理解できませんが、福者や聖人が生きた時代やその行動からくる列福・列聖の別のねらいなどもあるのではないのでしょうか。

A. 教会法の条文によると「神の民の聖化を推進する」と「キリスト信者がかれらの模範によって信仰心が養われ、その取り次ぎによって助けられるため」というのがねらいです。これらはいわば基本的なこととして示され

た目的ということになるでしょう。

一方、これらの列福・列聖制度そのものも教会の信仰行為の一つとして考えれば、そこに人知を超えた意味やねらいが込められているとも言えるでしょう。

それらは意図的に組み込まれたものや、信仰のセンスの度合いによって、各々が汲み取るべきものや、後になって「あーそうだったのか」と気付くようなこともあるのではないのでしょうか。

例えば、2003年10月19日マザー・テレサが列福されました。そのねらいは教会法の条文のものと同時に、現代社会への強烈なメッセージが含まれていたことは確かです。

それは、現代の貧しさの持つ意味と豊かさであり、世界の貧富の格差というゆがみへの警告であり、彼女の実践が示す、公会議後の教会のあるべき姿などです。

とくに、宗教的寛容と宣教の動機などは特筆すべきものがあります。

しかし、これらのねらいは公けに宣言されたものではなく、むしろ、各々が信仰のセンスを最大限に動員して汲み取るべきものでもあります。

Q. 来年予定されている列福式で一八八名の殉教者が福者に列せられることになりましたが、日本にはすでに多くの福者がおられると聞きましたが・・・。

A・それは、二〇五福者のことです。迫害の嵐が最も激しく吹き荒れた1617年から1632年までに殉教した外国人を含めた二〇五名の方々が1867年7月7日、教皇ピオ九世により福者の列に加えられました。ですから来年中には日本の福者は合計三九三名ということになります。

また、1862年は日本のカトリック教会の復活のきっかけとなった大浦天主堂での「信徒発見」（1865年）の3年前ということになります。この年二十六聖人の列聖式も行われています。

日本の教会の夜明けの時に相前後して、強力な援軍が勝利の教会と言われる天国から送られて来たともいえます。

日本という国が長い鎖国を解いて世界に開かれようとする時期でもありました。ですから、開国された日本にキリスト教が入り込むことを意図したものであったとも言えるでしょう。こうしたいわば政治的ねらいと同時に、教会の新たな復活に過去の勇敢な信者が参列し、これに花を添え、ともに日本の地に福音の種を蒔くという、出発のファンファーレの役を列福・列聖式に込めたとも言えるのではないのでしょうか。

Q・来年行われる列福式に、わたしたちはどのようなメッセージを汲み取ったらよいのでしょうか。

A・教会法典が教えるように、福者・聖人への正しい崇敬を学び、かれらの取り次ぎを願うことはとても大事なことです。

そのほかに、現代というこの時に行われるわけですから、いわば「時のしるし」としてのメッセージを鋭く捉えることが勧められていると思います。

例えば、全国から限なく列福者が選ばれているという意図を考えれば、日本の教会は地域によって信仰の質においてかなりの違いはあるものの、殉教的熱意を持って宣教に取り組むという基本においては、一致すべきだというメッセージを受け取ることもできるでしょう。

よく関門海峡を境にして、東と西の教会では、その信仰の質において異なっていると言われます。そして、現状では互いの違いを評価し合うというより、どちらかというところ、批判し合っているというのが事実のようです。

全国限なく選ばれた列福者および名も知られぬ殉教者達の参加を得て、日本の教会の東西の出会いが始まることになれば、こんな有意義なことはないでしょう。そういう意味で列福式もメインになる会場で行われる必要がありますが、何らかの形でこのメイン会場と全国のゆかりの地とを結ぶことができれば、これまたとても意味のあることになるでしょう。

その他、今回は日本人だけであること、司祭と信徒のバランス、ある特定の修道会等に

よるものではなく、日本教会の内部からの盛り上げによる列福式であること、一家そろって殉教していることなど、汲み取るべきメッセージの泉は極めて豊かです。

Q・「殉教の必要のない社会づくり」について考える必要はないのでしょうか。

A・信仰ゆえにいのちを奪われるような社会は正常な社会とは言えないことは確かです。

自分の信仰にいのちを賭けるほどの熱意を持って取り組むことは大事ですが、すべての人の信仰の自由は保障されなければなりません。これは、人間の人權に関わることです。かつての福者・聖人たち、そして迫害下にあつて雄々しく信仰を守りつづけた名のなき方々はその英雄的行為によって「殉教の必要のない社会づくり」を訴えつづけたのだとも言えます。

ひるがえって、「いじめ社会」とも言われる現代の社会において、この自分はいったい迫害者なのか、それとも被迫害者なのか、その真剣な識別を自らに迫ることができれば、来年の列福式はひとごとではなく、自分のこととなって、ほんとうの意味で「参加」する行事となるに違いありません。



新しい要理

「共に歩む旅」(3)

第一課 「神とは

どんな方ですか」



これまで2回にわたって、新しい要理「共に歩む旅」の紹介と進め方について説明してきました。これからは毎号その内容を紹介していきますので、このテキストを使って、地区集会や家庭集会で実際に試みていただければ幸いです。

【進行係】（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）
「主よ、この集いにおいて下さり、私たちを導いてください。」

A. 私たちの生活
【進行係】「どなたか次の話を読んでくださいませんか。」

【お母さんの傘】

私は生まれた時から体が不自由で、松葉杖や車椅子の生活をしています。誰かの手を借りずに旅行に行ったりすることは不可能ですが、そんな私が友だちと列車に乗り、海に行つて泳いだり、バレーボールをしたり、炊事をする夢を見るがあります。

時にはお母さんに痲癩を起したりもしますが、そのたびに、母は私をなだめたり笑わせようと苦勞します。母の気持を分かっているながら、母を傷付けてしまう自分が嫌になるときも数多くあります。

小学校三年生のある日、朝から大雨が降り登校の時に母に見送ら

れながらスクールバスに乗りました。しかし、午後になつても雨はやまず帰りのスクールバスから降りてみたら、母の姿が見えませんでした。

母の姿が見つからず寂しかったのですが、一人ででも家に帰られることを見せたくて、私はおそるおそる自分の足で歩こうとしました。しかし、すぐ溝の中に倒れてしまいました。

人々に見られるのが恥ずかしくて、急いで起き上がろうとしましたが、心はあせるものの体はいうことをききません。ようやく起きあがり、足を運ぶ私に、誰かが後ろから傘をさしてくれました。振り向くと、そこに母が立っていました。目には涙を溜めたまま・・・。

私は今も母のさしてくれた傘の中で、自分一人ぼっちではないことを発見し、胸が一杯だった幸せな日思い出したりしています。

【京郷雑誌】(韓国) 1998年9月号より

【進行係】（参加者たちに質問する）
①「障害を持つ子供を見守っていた母の思いはどんなものだったと思いますか？」

②「自分が誰かから深く愛を受けた体験があったら、皆で分かち

合ってみましょう。」
（一組対話をしてから全体で発表する。）

B. 神のごとば

人生の旅の途中で、私たちは時々自分を越える絶対的な存在を感じることがあります。抽象的な理屈で割り出したものではない、そのような存在を「神」と呼びます。神は私たちをいつも愛をもって包み込み、抱きとめる両親のような方です。神が私たちをどれほど愛しておられるのか聖書から学びましょう。

【進行係】「どなたかルカ15・11・24（放蕩息子のたとえ話）を読んでくださいませんか。」

——聖書を読む——
「他の方がもう一度読んでくださいませんか。」

【進行係】「次の聖書の句を一人ずつ折るような心で読んでください。（同じ句を3度繰り返して読む間、他の人々は沈黙を守ります）

「父の所に行つて」 3回

「あわれに思い」 3回

「走り寄つて首を抱き」 3回

「いなくなつていたのに」 3回



「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛(くびき)を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:28,30)

【進行係】(参加者たちに質問する。)

①「下の息子が父のもとに戻って行くときの思いをお互いに話し合ってみましょう。」

②「父は帰ってきた息子をどのよう

に迎えましたか。」

「神はこの世の困難と苦しみの中にいる私たちに、真の平和をもたらしてくださる休息の場であり、魂の安息の場である」と福音書は紹介しています。

【参考聖書】

*詩編139:1-14:神よ、あなたは私を知っておられます

*イザヤ49:15, 54:10:神の愛

*Iヨハネ4:7-21:神は愛である

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

神は人間の魂の深い所に、神を慕う心を置かれました。だからすべての人、生まれた時から渴くように神を求め、心の故郷である神のもとに辿りつくまで休息を見出すことはできません。その方は私たちが神を探す前から私たちを知っておられ、神を求めるよう招いておられます。信じて受け入れれば、私たちとともにおられる神が私たちをどれほど愛し、守ってくださるのか実感できるようにしましょう。

【進行係】(参加者たちに質問する。)

「なぜ教会に足を運ぶようになったのかお互いに話し合ってみましょう。」

【進行係】(十字架の印をしながら終

わりの祈り、を唱えて集いを終ります。)

「父と子と聖霊のみ名によって、アーメン。」

【進行係りの心得】

*いろいろな動機で集まっている人々の内面に気をつかう。

*最後に「お母さんの傘」の話に戻る。

愛の体験II 神体験

【覚えましょう】

1. いくつか十字架の印をしますか

*お祈りの始めと終わりにこの印をします。

2. 十字架の印は何を意味しますか

*十字架の印は、父と子と聖霊の三位一体の神の愛の交わりの中にわたしたちが入っていることを意味しています。

3. 「アーメン」とはどんな意味ですか

*「ほんとうにそうです」、
「ほんとうにそうなることをお願
いします」という意味で、祈
りの最後に「アーメン」とい
うのは、その祈りに同意して
その祈りが実現することを願
う心がこめられています。

4. 聖水はぶつうの水と違うので

すか。
*聖水は通常の水と違い、司祭
が祝福した水のことです。

5. 両親は他の宗教を信じていま

す。私だけカトリックを信じて
いいのですか

*勿論、問題はありません。

私たちは生きていく間、解けないいろいろな疑問を持ちます。「なぜ、人生はこれほどまでに苦難に満ちているのか」「なぜ私だけにこんな不幸が」「死後はどうなるのだろうか」「どうすれば心の平和を得られるのだろうか」など。

このような問いについて、それぞれの宗教はそれなりの究極的な答えを提示します。カトリックは他宗教の提示する真理の教えを尊重します。また他の宗教を信ずる人々の生活と行動様式だけでなく、彼らの戒律と教義も尊重します。ですから家族が他の宗教を信じているといても、何も問題になることはありません。

6. カトリックになっても他宗教

方式で先祖供養を行ってもいいですか

*はい、先祖供養をしてもいいです。

先祖供養は自分を生み育ててくれた先祖に対してその恩に報いるために、生存中と同じく敬意を尽くすことです。カトリックも先祖追悼を誠意を込めて行います。そしてかれらが、神の国で永遠の安息を得られるよう祈ります。

【祖先と死者についてのカトリック信者の手引】参照

〈シリーズ〉共に生きる信仰

日本の教会の
現状、課題、展望 (5)

溝部 脩 高松教区司教

7. 日本の教会の
3つの大きな潮流

① 社会への挑戦

現在の日本の教会には、社会問題に目覚めた人たちの活発な動きが見られます。正義と平和の委員会、部落問題委員会、外国人の司牧、人権の擁護、世界の平和、国家主義へのプロテストとか、いろんなものがあります。多分今の日本の教会で、一番元気があるのがこのグループかもしれません。現

代社会に生きる人々に、福音を生きたことを身体で表そうとしている人たちです。社会にメスを入れながら、社会そのものを福音化しようと考えています。現代の矛盾に目をつぶらない厳しさを持っています。

同様に、具体的に社会問題に取り組んでいる人たちも大勢います。ホームレスへの配慮や炊き出し、あるいは視覚障害者への配慮、カトリック障害者連盟など。また、ボランティア活動とか、いろんな活動がカトリック教会にはあります。いずれもキリスト教を土台としながら、福音宣教を模索してい

るのです。

同じように教育の分野でも新しい動きが非常に活発です。私はカトリック学校教育委員会の委員長をしてきましたので、それが言えると思います。今まで、司祭やシスターが経営していた学校経営が信徒の手に移っています。あるいは、信徒でない人の手に移っています。その中でカトリック性をどのように維持し、どのように理事會を活性化するかという動きがとも活発になっています。ある意味では、以前よりもっと、カトリック性を強調しているかもしれません。以前は、司祭やシスターがカトリックということをごわごわ出していたのを、信徒の責任者たちは逆にもっとはつきりと打ち出そうとしているのです。

先日アメリカの雑誌「アメリカ」を読んでいましたら、日本のカトリック教会についての記事があるのに気付きました。その中で、社会問題に真摯に取り組んでいる日本カトリック教会と司教団を高く評価していました。日本の社会で少数派ではあるが、教会の取り組みと社会的影響という点で大いに見習うことがあると力説していま

した。ほめすぎかもしれませんが、確かに日本のカトリック教会は真面目に問題に取り組んでいるといえます。

ただ、社会への挑戦ということの問題にしている人たちもいます。例えば、カトリック新聞を読みますと、右と左が、天皇制についてとか、司教の政治活動についてとか、議論が絶えないのです。私のところにも絶えず投書がきます。私は司教団の中で年長者なので、少しは問題が分かるのではないかと思われているからでしょうか。

日の丸論争とか、君が代論争とか、政治的色彩が強いという批判もあります。それを全部含めても、社会という問題に取り組もうとしている教会の大きな流れがあることは確かです。今までの1対1で公教要理を習い、洗礼を受けるといふのとちよつと異なる宣教論を持っている流れでもあります。

② 霊性を深める

今の教会は世俗化されていて俗っぽい。神父たちに祈りが足りないし、告白など全くしない教会になってしまったという批判があり

ます。教会に行っても、何か酒飲みの場所みたいになってしまっている。教会はもっと祈りを大切に、キリスト者としての生き方を大事にする教会でなければならぬのではないか。司祭に対しての鋭い批判がふき出し、神学生の養成についても疑問をもっている。教会は霊的に深まる必要があることを主張する人は少なくありません。

これに呼応するかのように、教会には新しい運動が雨後の筍のように起こっているのです。マリッジ・エンカウンター、フォコラーレ運動、私たちの教区では新求道共同体の道とかいった運動です。また数知れない在俗会が日本に入りこんでいます。いずれも司教とか司祭とかではなく、信徒たちの中から起きてきている運動なのです。教会を刷新する動きが信徒を中心として展開しようとしているのです。

これらの運動は信者の心を捉えていて、特に若者層をしつかりとつかみ、教会の大きな希望となろうとしています。組織にこだわって、組織にあぐらをかいている教会に飽きたりない別の流れが今大きく動いていると言えます。多分

摂理的な現象と言つてよいのかも
しれません。

これらの運動に共通している点は、共同体性を強く打ち出していることです。砂漠の中で神と出会うというタイプではなく、都市の中で人々との出合いを通して神と出会うことを求めます。組織に縛られない、ゆるやかな共同体をつくることで、人々が近づき易い親しさと家庭的な雰囲気を作り出すことに成功しています。あるいは、徹底した共同体性を打ち出して核を増やす方式を選んだりします。共同体を強調する筈の既存の修道会がそれらを失っていくにつれ、在俗の人々の間に共同体を求めるという風潮があるのです。

しかし、この運動についても批判が意外と多くあります。組織を度外視して運動を展開するとか、社会問題の目覚めが極端に少ないとか、自分のセクトをつくって教会を分裂させているとかという批判です。多分に、これらのグループは自分たちがしていることが最高のものと思いがちですし、排他的になる可能性は十分にありま

なく、自分たちがしていることが神の意志であると思ひ込み過ぎるからでもあります。しかし、第二バチカン公会議後の流れは、上意下達の時代から、運動が下から起こっている時代に入ってきているのは確かです。今からこれらの運動はどのように発展していくのか、今はよく見えます。しかし、はっきり言えることは、これらの運動は教会を下から揺さぶるだろうということ

③ 組織化に向かう

組織化については良い面と悪い面があります。教会は今まで余りにも場当たりの教会運営をしてきたと言えます。日本の法律、宗教学法など現在の日本はきちんとした運営を宗教団体に要求しています。もちろんどの教区もこの点に関しては努力をしていますし、その成果も挙げています。それも単に宗教学法が要求するからではなく、組織をしつかりすることで福音宣教を促進しようとしています。教区の中核である本部組織がしつかりしていないと、どうしても個人のカリスマに頼るとい

ことになります。高松教区は、この点で少し等閑にしたことが原因で、教区内の一致が大きく崩れました。

しかし、組織化を促進することで批判が無いわけではありません。教区や小教区の方向性を強く打ち出すのは良いことですが、個人が持つ能力とか、イニシアティブが削がれる危険性があるからです。やたら会議ばかり多すぎて、話し合うのみで、それを実践する人がいないとの声もあります。もう会議はうんざりだという悲観論者も出てくる始末です。決めたことをどのように実行し、教区の背丈にあつた組織をどのように作っていくかは大きな課題です。

同時に会議そのものを信仰の目でみつめ、会議そのものの中に神様の手を入れてみる事です。すなわち、単なる会議にしてはいけないということです。会議を通して神様の手に導かれることを実感し、会議を祈りに変え、決定したことを確固たる信念でもって実行することです。



聖書

豆知識


 わただよ

聖書の「筆者」は誰？

Q

以前、聖書が「聖なる書物」である理由を説明しておりましたが、その中で、「聖書は人間の働きによってのみ書かれた書物ではなく、神の霊である聖霊が働き、双方の協働によって書かれた。」と言われていました。しかし実際に、「聖書の『著者』は誰か？」という問いに対して、私たちはどのように考えればよいのでしょうか。「神」なのでしょうか。「人間」なのでしょうか。それともやはり「両方である」と答えるべきなのでしょうか。

A

この質問は簡単なようで、実は難しい質問なのです。恐らく皆さんは、「神が聖書の著者である。」と聞けば、それに異論を唱える人はいないでしょう。何と言っても聖書の言葉は、神の言葉なのです。しかしでもよく考えてみると、神は御自分の言葉を人間が分かるように、ペンを取って、紙の上に人間の文字を用いて書いてわけではないのです。それはあくまでも人間が行なった作業であり、人間だからこそ、人間に分かるように書き付けることが出来たのです。それなら「人間も聖書の著者である。」と言ってもよいのではないかと主張なさる方もいるかもしれません。でも一般的に、聖書は「人間の言葉である」とは言いませんし、そういう表現を聞

くこともないはず。だからこそ、どう説明しているのか大変難しいわけ。そこで折衷案として、「神も人間も、共に聖書の著者である。」ということであれば、問題は収束に向かうような気がします。ところが、これもまた問題です。それは、その両者が著者であるとは言いつても、それが同じ意味で言われるはずがないからです。また神と人間の間には大きな差があるわけですし、その働きにも大きな違いがあることを認めざるを得ないからでもあります。このように考えてくると、如何にこの質問に対する答えが、平坦ではないかお分かりだと思えます。

実は、聖書の著者については、以前にもかなり議論がありました。それは聖書の中に、記述の誤りがいくらか含まれているからなのです。例えば、マルコ福音2章23〜28節には、安息日にイエスの弟子たちが歩きながら、麦の穂を摘んだという話があります。ファリサイ派の人々は、彼らの行為を見て、律法を遵守していないと言ひ、イエス共々彼らに批判を浴びせかけている話です。その解釈は別にして、イエスも彼らに反論しながら、ダビデも神の家に入り、祭司以外は食べてはいけない聖別されたパンを食べたことを例に挙げて、自分たちの正当性を主張しているわけです。この中で、それは「アビエタルが大祭司であった時」(26節)であったとイエスの口から言われています。しかしサムエル記上21章2〜7節を読むと、その出来事は、「アヒメレク」が「祭司」であった時のことです。明らかに両者には、食い違いがあることが分かります。これは一例ですが、こうした食い違いや間違いが聖書にあるからこそ、その著者(神なのか、それ

とも人間なのか)が問題になったのです。

そこで、大きく二つの意見に集約されます。一つは、フランツェリン(Franzelin)の意見です。彼は、聖書に書かれている内容やその真理性と、実際の言葉や表現とを区別しました。つまり、聖書は神からのメッセージであるから、神がその著者であり、その内容は完全に誤り得ないとしたのです。人間は神の協力者として、言語を使って、それを実際に書き記したと言っています。いわば、人間は聖書を記すための道具的役割を果たしたことになります。だから彼にとつては、神こそがその著者であり、人間は協力者に過ぎず、人間の不完全さから誤りが生じたわけ。他方、ラグランジュ(Lagrangé)は、神も人間も共に聖書の著者であると主張しました。しかし、双方が著者であるとは言つても、その意味が異なることを強調しました。神は、聖書のメッセージとその真理を提供した著者であり、人間は、実際にそれらを書き記した著者であり、単なる協力者ではないと言っています。故に聖書は、完全に神の業であり、完全に人間の業であるということ。とは言つても人間には限界があつて、誤りを犯す余地があることは否めません。

両者の意見は同じように見えますが、しかし考え方が違います。どちらが正しいのか、間違っているのかという議論は、ここでは無意味なように思えます。どちらも理が通っていますが、ただ後者は、少し理解するには難しく思えます。前者はそれに比べて、素直で単純な意見で理解しやすく、両者に違いがあるとすれば、そういう点ではないでしょうか。

(湯浅 俊治)



いのちを尊ぶということ

私達は、生きているということや生かされているということ、生活の中で感じる時があります。そんな時、この命は私だけのものではないと感じます。

「はるかちゃんの死」

はるかちゃんは、1歳を過ぎ、あんよもしっかりし、笑顔を振りまく可愛い盛り。急に高熱が出て脳症になり、反応が全くない寝たきりになりました。ママは次の子の出産で産院に入院しています。パパが仕事を辞めて病院につきっきり。私達は音楽ボランティアでその病室に行った時、はるかちゃんに出会いました。話しかけても瞬き一つしません。反応はなくても聞こえているに違いない。はるかちゃんの好きな童謡を歌いました。

一年後、はるかちゃんは天国へいきました。告別式のお別れで私達は「ビリーブ」と、手話で「未来へ」を歌いました。参列者は全員涙を流していました。はるかちゃんから、反応はなくても、病院や家族に支えられて生きているということ、全ての人がかげがえのない存在であるということ、また、小さな命をいとおしむ家族の姿に命の尊厳を学びました。

「かあさんの歌」

作詞作曲の窪田聡は、高校をさぼって煙草を吸ったり、大学に入学するふりをして入学金をだまし取って家出をします。ある時、どのように所在を突き止めたか母親から小包が届きました。寒いだろうと手編みのセーターや食料が入っていました。“母さんが夜なべをして手袋編んでくれた。木枯らし吹いちゃ冷たかろうて、せっせと編んだだよ。ふるさとの便りは届く。いろりの匂いがした”。養護老人ホーム訪ねた時に「故郷」を歌って下さいと職員に言われました。「故郷」のあと、「『かあさんの歌』を歌います」と言って、親不孝の息子の話をしました。私の歌を入居者はじっと聞いていました。右後方の男性は、涙を浮かべていました。私のそばの女性は

歌が終わった瞬間「ウワーっ」と大きな声をあげました。職員は「こんな大声を聞いたのは初めて」とびっくりしていました。女性は何を感じたのでしょうか。女性の心に響くもの、感じるものがあったのでしょうか。

「けんちゃんとの20分の出逢い・出会い」

私達音楽ボランティア「えだまめ」に、けんちゃんにあってほしいと連絡がありました。

けんちゃんは、病院の個室で母が付き添っていました。医師から面会は20分だけとのことで、私達はフルートで「砂山」の他に数曲歌いました。五日後けんちゃんが息を引き取ったと連絡がありました。あの時は「後僅かの命」と分かっていたそうです。母親は息子は機械に生かされている毎日であるが、最後に本人の好きな生の音楽を耳元で聞かせたいと思ったといいます。音楽は廊下を流れ、他の病室に響きました。いつの間にか車椅子や輸液の子ども達が病室の入り口に集まっていました。

私は、彼らが「どんなに重い病気や障害があっても、施設や病院や家庭で今を生きている」ことの重さを日々教えられています。全ての人々の命の重さは同じだと教えられます。私は、何の支え、力にもなってあげられないけれども、彼らの人生に寄り添おうとすることはできます。今日も施設の入所者から「あいたいです」と手紙がきました。彼らの気持ちを共感できるためには自分の感性をもっと磨かなければと思っています。人間にとって大事なことは、知識と同じく、いや、知識よりもこころを豊かにすることだと思います。

金松敏信（かねまつ としのぶ）



旧野首教会を訪ねて・・・

去る10月23、24日に、今は無人島となり、教会だけがひっそり残されている旧野首教会を始め、上五島教会群への巡礼が企画され、44名が参加していた。

そこで今回はこの巡礼を企画された方にいろいろと伺ってみました。

☆この巡礼を企画されたきっかけは何ですか。

長崎大司教区では、この一年間を聖フランシスコ・ザビエル生誕500年を記念して、各種の行事を実施しています。宣教委員会巡礼部もその主旨に従い、去る5月には、山口で聖人の足跡を訪ね、8月には、上陸地下関で聖人を称えました。そして、この年を締めくくる行事として、五島で最初にこの聖人を保護者として建立された、旧野首教会でミサを捧げ、先人たちの信仰の証しであった御堂に触れたかったのです。参加者の中には、五島巡礼は初めてと言う方、金祝を迎えたシスター、野首島出身者、仏教徒の方7名もおられ一緒に祈りました。

☆野首島を訪れる前に、ハプニングがあった

そうですね、どのようなことだったのですか。

野首島は人々が去って40年が過ぎ、今は500頭余りの野生の鹿が堂守しています。この島の出身者をはじめ、参加者全員が旧野首教会でミサにあずかることが願望でした。しかし、巡礼の初日バスで移動中、チャーター船の船頭から、波が高く、明日船は出せません、と電話が入ったのです。事

の次第を告げると、落胆の聲がバスの中に渦巻きました。風がおさまるように祈らんばね、との声が小さく響き、苦しい時の神頼みでした。そこで、二日目のコースの変更を考えていると、ケイタイが鳴り、船頭から「風向きが変わりそう、6メートルの波も明日は半減する。船を出そう」と言われ、海の男の五感が巡礼者を勇気づけたのでした。「神風が吹いたぞ！」こうして船が出ることになったのです。

☆島に上陸し、ミサを捧げられた様子を聞かせてください。

海面は白



波、船は木の葉のよう、船酔いでダウン寸前の者もいました。船を降り、急な坂道を10分余り歩くと、本物の大パノラマが眼前にせまり、野首教会が飛び込んできました。すると、年配の婦人が走り、住み親しんだ石垣を抱きし

め、「とうちゃん、かあちゃん帰ってきたよー」と、人目もはばからず大声を上げた姿には、全員が興

奮気味でした。500頭余りの鹿は恐れをなしたのか姿を見せず、2、3頭が遠くで草を食んでいました。

ミサが始まり、橋本師が祭服姿で中央に立った時、電気はなく、堂内はうす暗かったが、歌ミサで全員が声を限りに、聖歌を歌いました。信徒で管理人の瀬上さんが、すかさずさび付いた鏡戸を開けられると、ギーと小さく音を立て、陽の洪水が堂内にあふれました。橋本師は、「40年間砂漠をさまよったイスラエルの民のように、40年ぶりにこの信仰のふるさとに帰って来た」と説教を締めくられ、心が満ち足りたミサとなりました。

☆他にはどこへ行かれたのですか。

上五島の教会群15カ所を巡りましたが、圧巻だったのは頭ヶ島教会でした。明治の終りから大正にかけて、17戸の信徒たちが山から石を切り出し、鉄川与助の指導のもと、一つ一つ石を積み上げるのを手伝い、10年の歳月をかけて完成させた教会に入堂した瞬間、時間が止まった感じで心が響きました。そこには、信仰の匂いが漂っていました。

☆参加者の感想などお聞かせ下さい。

*一年後、野首教会は創立100周年を迎えます。生かされておれば、皆さんと式典に参加します。

*私は20歳までこの島で生活しました。船から降りて実家跡に走りました。井戸や家の土台を見た瞬間、走馬灯のように昔のことが頭の中をよぎりました。うれし涙の巡礼でした。

*迫害に耐えた先輩のおかげで今の私たちがあります。「信仰」をありがとう、と感謝の気持ちでいっぱいです。

福祉委員会より：

NPO法人 ちゅーりつぷ会

長崎ダルク



長崎教区福祉委員会と長崎ダルクのとのかわり、2002年にさかのほります。これまでの約4年間、長崎ダルクの幹事の一人としてサポートして来ましたが、十分ではありませんでした。しかし、今年7月22日、長崎ダルクは長崎市松ヶ枝町にある旧香港上海銀行長崎支店記念館でNPO（特定非営利活動法人）設立総会を行いました。現在、法人化への申請の準備中です。そこで、今回はその価値を知っていただくため、長崎ダルク法人化への経緯と活動について簡単に説明させていただきます。

◆NPO設立の経緯

数あるダルクの中でナイトケア（入寮施設）を持たないダルクは数カ所です。今回、法人化にこぎつけた主な理由は二つあります。一つは長崎ダルクにナイトケアが必要になったこと。二つ目は精神障害者地域活動所として、行政からの支援を受けておりましたが、今後5年以内に私たちがやっつけられるような小さなボランティア施設では支援を受けられなくなってしまう。

自立支援法に基づいて、ナイトケアとデイケア

を運営していくためには何らかの法人格を持たなければ、補助金を受けることが出来ないようになりました。このため、長崎ダルクは資本金が必要でないNPO法人を申請することにしました。

しかし、NPO法人格を取得しても運営自体が楽になるわけではありません。これまで以上に資金が伴う細かな仕事が増えますし、ダルクは薬物依存症回復者がスタッフをやっている団体のため、非常にストレスを感じているのが現状です。

長崎ダルクは7年間の活動の中で赤字運営が続き、代表に借金が増えたこと、資金難のため活動に必要な自動車を購入できないこと、デイケアと今後始まるナイトケアのスペースの問題など、解決すべき現実的な問題が山積しています。しかし、NPO法人長崎ダルクは、社会資源となるべきものです。ダルクにつながってくる人達は皆、社会的弱者です。神と人の助けが必要です。弱者こそ守られ、愛されるべきです。薬物依存症は薬物使用を自分の意志・力ではコントロールできない病気です。病気でしか治療が有効です。現状では薬物依存症は、「意志の弱い人」「社会の落伍者」

などの誤解・偏見が根強く残っていますが、同じ病気で苦しんでいる人同士がミーティングを重ね、自分が抱えている心の傷と向き合うことで回復の可能な病気なのです。

◆現在のダルクの活動

現在、施設利用者は二名（全男男性）です。毎日、薬物依存症のリハビリプログラムとして、一日二回のグループミーティングと自助グループ（NA）の参加を実践しておりますし、他県で開催されるダルク・フォーラム、薬物依存者の集いなどにも定期的に参加しています。また情報誌の発行なども行いながら、リハビリ中のメンバーをサポートしています。

その他、昨年度から法務省の要請で薬物防止指導の講師として、スタッフ二名が定期的に長崎と佐世保の両刑務所に行き、覚せい剤などの受刑者を対象にミーティングを行い、ダルクという回復とリハビリの場所があることをメッセージしています。また、学校等で薬物乱用防止教室の講演活動なども行っています。薬物の相談件数は昨年と変わりませんが、最近では長崎市外からの相談が多い傾向にあります。

長崎ダルクはみなさんの支援のお陰で徐々に活動の輪を広げ、薬物依存者やその家族にとって救いの場になっています。長崎ダルクを卒業して社会復帰を果たし、就職し、結婚したメンバーも数人います。これからも薬物依存の回復プログラムが社会はもとより悩んでいる本人や家族にメッセージが届くよう、活動を続けていきます。今後でも多くの依存者が回復するようにみなさんの支援を心からお願いいたします。

生活教会 の中の



上神崎教会

フォトプラン 山本 富夫

上神崎

平戸島の北端、薄香湾と平戸瀬戸を臨む小高い丘に建つ上神崎教会堂。

信仰の芽生えは明治初期、黒島、上五島からの移住によるという。

一八九一年、二年半の歳月を掛け、「潮の浦」の谷合にコーモリ天井の聖堂を建立。時に五十戸ほどが居た。

その後、大正になって増築。しかし、六十余年の風雪に勝てず、老朽化。

一九六九年、新たに敷地を求め、長年の積み立てを資金に、双塔を持つ現教会堂を完成。数戸から始まった信仰は、百七十余戸になっていた。

平戸大橋を通ると、双塔の教会堂が遠く小さく見える。その双塔は手を合わすかのように、天にすっと伸びている。